秋田市で来月「だんすのじかん」

踊り手と語り楽しもう

本県ゆかりの若手　初のイベント企画

終演後に観客と交流

本県ゆかりの若手ダンサーたちが2月11日、秋田市大町のギャラリー・ココラボラトリーで「だんすのじかん」と題した催しを開く。小さな画廊の限られたスペースで、踊り手の息遣いを感じながらダンスを鑑賞。終演後は観客とダンサーが語り合い、ダンスの楽しさや奥深さを共有しようという試みだ。

「ダンスはコミュニケーション手段。リラックスして踊りを見ながら、自由に雑談ができる場にしたい」。発案者の一人でダンサーの川村真奈（32）＝秋田市出身＝は語る。幼いころからモダンダンスを学び、国内のコンクールで活躍。22歳で渡米し、ニューヨークでダンサーや振付師として活動してきた。今回の試みは、その時の経験が基になっている。

ニューヨークではダンサーが観客の間近で踊り、終演後は共にダンス談議を楽しむことが多いという。「観客とやりとりするスタイルに初めは戸惑った。でも自分が思いもよらなかった見方をしてくれたり、感想を言われたりと、さまざまな発見があった」と川村。秋田でもそんな機会をつくりたいと今回の企画を考えた。

出演は秋田市出身のUKジャズダンサー・YOSHITAKA＝ヨシタカ＝（34）や川村のほか、同市の安達香澄、加賀谷葵、岸野奈央、渡部悠、北海道出身でニューヨーク在住の篠原憲作という若手7人が出演。モダンダンスのソロやデュエット、群舞を踊り、観客と語り合う。

ヨシタカは「自分のダンスがどこまで伝わったのか、踊った後はいつも気になる。見た人たちと語り合えるのが楽しみ」と話す。27歳のころ、サルサやタンゴ、フラメンコなどさまざまなダンスの発祥地を巡って世界中を旅した。「それぞれの土地にはそのダンスが生まれた『理由』がある。現地の人と文化に触れ、ダンスが生まれた風土もろとも体の中に取り込みたかった」

その過程で知ったのは、時に抑圧や苦しみがダンスを生み出すということ。自身が踊るUKジャズダンスも、英国の植民地だったジャマイカからロンドンに移り住んだ黒人たちが、差別を受けながらも生み出した文化だ。

「例えばキューバで陽気なサルサやルンバが生まれた背景には、貧しさがある。生活は苦しいが生きることを楽しみたいという人々の思いが、新しいダンスを生んできた」とヨシタカ。今回の催しでは、世界を旅して学んだダンスの要素を織り交ぜながら、川村とのデュオを踊る。

川村はこの催しを継続したいと考えており、今回を「第1回」とした。「作品のこと、世界のダンス事情、ダンスへの思い。踊りを通していろいろなことを話せる時間を提供していきたい」

午後3時からと5時半からの2回公演。チケットは一般千円（大学生以下700円）。午前11時～午後0時半には、篠原による振り付けやダンスのワークショップを行う。参加費千円。問い合わせは川村☎018・864・5980

（三浦美和子）

イベントで踊るデュオの稽古をする川村とYOSHITAKA。「不思議な雰囲気の作品にしたい」と語る

20周年の

新曲

情熱的な

ロックバン

KUNG-

ERATIO

周年のスタ

グル「R-

は、行定勲

ンクとグレ

して書き下

「映画の

あがってき

『疾走感』

意識の強い

ようなもの

場人物に向

ジも考えな

と、ボーカル

正文はコン

昨秋

「国民文化祭かごしま2015」（昨年11月・鹿児島県）に出演した県内六つの団体が30日、秋田市中通の

「AS-

N」の